

「み心が地にもなるように」 (兵士の陵辱、十字架の道)

マルコ15:16-24

挽地茂男

2019.9.15 日本基督教団千歳丘教会

わたしたちは今、受難物語を読んでいます。受難物語には名場面が多く出てまいります。と言いましても、福音書はすべて名場面集のようなものですが、一つは絵画的であること、絵になるということではないかなと思います。



わたしは幼い頃に、まだお話の筋も意味も分からない頃に、歌舞伎に祖母の趣味で引っ張り回されたので、歌舞伎の名場面がたくさん記憶に残っています。明るい照明に照らされた歌舞伎の舞台は、非常に絵画的です。絵になります。歌舞伎役者の決めの格好や所作や見得、衣装、舞台装置など、今でも強く印象に残っています。そのせいか今でも、絵のように心に焼き付くものに、興味が引かれます。

福音書はどうして名場面集、ドラマのようになっているのでしょうか。それはパウロの思想的な言葉とは違って、わたしたちの心のキャンバスに絵として留まるためだと思います。ドラマは人の心に残ります。そして人生において必要なときに、わたしたちを支え、わたしたちに信仰的勇気を与え、もう一つ別のドラマを再生産する力を持っているのです。小説や映画に劣らず福音書は、わたしたちを主イエスのドラマに誘い、主イエスとの出会いという信仰の経験に導き、新しい人生のドラマをも再生産するのです。

今日の福音書のドラマに入ります前に、歌舞伎の名場面を一つ取上げます。「勧進帳」の弁慶が判官ほうがんつまり義経ちようちやくを打擲する(打ち叩く)「判官打擲」の場面です。兄頼朝と不和になり、山伏(やまぶし)姿に身をやつして奥州(おうしゅう)



安政年間の市村座(演目: 暫)

へ落ちる源義経が、加賀国安宅の関〔あたかのせき・石川県小松市〕にさしかかるとき、関守の**富樫左衛門**（とがしのさえもん）に見とがめられます。機転を利かした弁慶が、火災に遭った奈良東大寺の再建のために勧進（寄付）を募る旅をしているのだ、と怪しい者ではないと説明して、富樫の疑いを切り抜けようと致します。それなら、勧進帳（勧進の趣意書）を読み上げよ、と関守から要求されますと、今度も、**弁慶**は機転を利かして偽りの勧進帳を朗々と読みあげます。うまくいったのです。しかし強力（修験者や山伏に従って荷物を運ぶ下男）に仕立てた（**判官**）義経が関所を通過しようとした時、その素性が見破られそうになります。すると今度は、強力を叱りつけ打擲して主君義経（**判官**）ではないことを証明しようとしします。その弁慶の胸の内、苦衷を察した富樫は一行を通します。説明だけでは絵にならないので、有名な主君義経を弁慶が打ち叩く〈打擲〉の場面の台詞を一くだり。富樫が待ったをかけたところから。

富樫 それは、こなた此方より留め申す。

弁慶 されば何ゆえ留め候な。

富樫 あの強力がチト人に似たりと申す者の候程に、さてこそ唯今留めたり。

弁慶 何と、人が人に似たりとは、珍しからぬ仰せにこそ。さて、誰に似て候ぞ。

富樫 ほうがん判官どのに似たると申す者の候ゆえ、らつきよ落許のあいだ間留め申す。

弁慶 ナニ、判官どのに似たる強力め。いちご一期の思い出、あら腹立ちや。日高くば能登の国まで越さうずると思えるに、僅かのおい笈一つ背負って後に下がればこそ、人も怪しむれ。総じてこの程より判官どのよと怪しめられるは、おのれが仕業の拙きゆえなり。ムム、思えば憎し、憎し、憎し、いで物見せん。

地（唄） 金剛杖をおつ取って、さんざんに打擲（ちょうちゃく）す。

ト 弁慶、金剛杖にて義経を打つことよろしくあって、

弁慶 通れ



〔左から〕源義経（坂田藤十郎）、武蔵坊弁慶（市川團十郎）、富樫左衛門（松本幸四郎）

安宅の関で、強力と偽って、関守富樫左衛門の目から身を隠そうとして隠しきれない義経、主君を助けようと必死の弁慶、その主君に



対する弁慶の強い思いにふれる富樫。ぶつかり合う三人の立場と心。最期に弁慶が「飛び六方で」花道を下がるまで、終始気

の抜けない名場面が続きます。

歌舞伎の評論家は「勧進帳」を評して、「知恵と仁〔他者への思いやり。情け〕と勇気」の物語と語りました。危険を知りつつ安宅の関を回避せずに勇気を奮い立たせ、知恵によって突破していく弁慶と義経の一行。途中で強力に身をやつした義経に気づきながらも、弁慶の主君をも打擲して(打ちたたいても)救おうとするその一途な忠義心を読み取って、そっと見逃す富樫の仁。義経の逃避行を詮議する関所の場面は、「知恵と仁と勇気」が露わになる場面として評価されます。

さてわたしたちの受難物語は、先週はピラトの裁判、つまり「ピ

ラトによる主イエスの詮議」の場面でした。ここもとてもドラマティック(ドラマ的)な場面です。主イエスがピラトの詮議をうけます。ピラトは主イエスの有罪を確信できません。しかし確信できないまま、群衆の「十字架につけろ」という声に負けて、死刑の判決をくだし、もう一人の囚人バラバを釈放します。



このシーンの前後の流れ(15章の文脈)はこうなっています。

- ①ピラトの尋問 (v. 1-5)
- ②死刑の判決 (v. 6-15)
〔バラバの釈放を含む〕
- ③兵士たちの侮辱(v. 16-20)
- ④十字架 (v. 21-32)
- ⑤イエスの死 (v. 33-41)
- ⑥イエスの埋葬 (v. 42-47)

6つのパートからなっています。わたしたちが今日読みますのは、③兵士たちの侮辱(v. 16-20)の場面と、十字架の場面の前半(v. 21-24)です。ピラトは主イエスに死刑の判決を下した後、主イエスをむち打って、身柄を兵士たちに引

き渡します。すると16-20節。



「15:16
兵士たち
は、官邸、
すなわち
総督官邸

の中に、イエスを引いて行き、部隊の全員を呼び集めた。15:17そして、イエスに紫の服を着せ、茨の冠を編んでかぶらせ、15:18「ユダヤ人の王、万歳」と言って敬礼し始めた。15:19また何度も、葦の棒で頭をたたき、唾を吐きかけ、ひざまずいて拝んだりした。15:20 このようにイエスを侮辱したあげく、紫の服を脱がせて元の服を着せた。そして、十字架につけるために外へ引き出した。」

ローマ総督ポンティオ・ピラトによる世紀の冤罪、世紀の大誤審、メシアに対する死刑判決という誤審がどうしても良いことのように、マルコは淡々と話を進めています。むしろマルコは、主イエスの最期の瞬間を、想像力を超えた人々の醜惡な姿で満たしているのです。パウロが言うように、十字架



につけられたメシアが、「ユダヤ人にはつまずかせるもの、異邦人には愚かな」(1コリ1:23)存在であることは少しも不思議ではありません。主イエスはそれほど屈辱的な姿をさらしているのです。自分に投げつけられるものはなんでも、彼はただ無言で受け止めます。このような男が、どうして神の力、世界を救う強い力、また、永遠の御心となんらかの関わりを持っているということがありえるのでしょうか。誰の目にもそうは見えないのです。ピラトはイエスの処罰を暴徒の手に放棄し、イエスを鞭打つように命じて、イエスから手を引きました。政治は正義の追及によってなされるのではなく、権力者の利害を損なわないための利害調整としてなされるのです。せめて、そのときピラトが、敬意をこめて丁寧に護衛兵にイエスを引き渡したのであれば、わたしたちはこの非道な場面に少しは耐えることができたかもしれません。

しかし、そうではなかったので



す。ローマの兵士たち——イエスを侮辱したからといって決して利益を得る立場にはいない舞台係——でさえ、小さな侮辱の儀式を計画していたのです。このような報復を誘い出すイエス・キリストとは、いったい何者なのでしょう。彼は死刑台に向かっていく囚人にすぎないのです（もはや無力な Dead Man Walking 「歩いている死人」にすぎないのです）。看守たちは花道をくだりながら、イエスをからかいます。明らかにこれが彼らの計画でした。なぜなら彼らは部隊全員をその見せ物に呼び集めているからです（15:16）。彼らのアイデンティティは、他人が彼らの力や権威を認めているという事実依存しているのです。そうすることがバカらしいときでさえ、彼らは自分たちの筋肉を誇示せずにはいられないのです。キン



肉マン（マッチョ）なのです。

そこで兵士たちはイエスに紫の衣を着せ、そして皇帝に対するように敬礼をします。「ユダヤ人の王様、万歳」（15:18）。おそらくこれらのローマ人たちは、ユダヤ教の信仰と習慣を物笑いの種にすることを熱望してきたのです。そしてこの徹底的に侮辱されたひとりのユダヤ人が、彼らにそのはけ口を提供しているのです。この場面全体の皮肉な事態（アイロニー）は極みに至っています。そしてわたしたちは、それを見落としてはなりません。わたしたちは、宗教（イデオロギー）上の敵対者——一神教のユダヤ人と皇帝崇拝者（異教徒）のローマ人——が、平和の君の死刑宣告を行うために同盟を結ぶのを目撃するのです。

マルコが描いているように、兵士たちは人質となった王を取り巻き、王が着る紫の衣を着せ、荊の冠をかぶらせ、葦の棒で彼の頭をたたき、唾を吐きかけ、彼を拝むふりをします。それは長くは続きませんが、全くばかげた場面です。

わたしたちは以前「キリストの変容」の物語を読んだとき、ラファエロの描く「キリストの変容」

が、同じ画面(キャンバス)の上下に山上の出来事と地上の出来事を同一画面に——同時に進行しているものとして——描いているとお話し致しました。そのラファエロの絵をご紹介したときに、ウクライナのヴェルテップ劇もご紹介しました。ウクライナには、上段と



下段の二層舞台によって上下それぞれ「別の物語」が同時進行するヴェルテップ劇と呼ばれる人形劇があります。

二重構造をもったマルコの「キリスト変容」のヴェルテップ劇の下段では、悪霊に少年が苦しめられている姿が描かれます。世界と歴史を悪しき力と人間の気ままな恣意と不条理が支配し、キリストなき世界は永遠に救いの光を見ることなく滅びへと進んでいくように思えます。しかし一方で、これと平行する上段の視点は、つまり山上ではモーセとエリヤが現れ、主イエスと何やらを話しています。律法を代表するモーセ、預言者を代表するエリヤ、律法と預言者すからイエスへと、すなわち律

法と預言者の「旧約の世界」から「新約の世界」へと…旧約の救いから新約の救いへと確実に、聖書的磁場を広げながら移動していきます。そして地上世界の不条理が、このような聖書的磁場から見られるとき〔に置かれるとき〕、天上から地上のことに参与する、キリストを遣わすことによって人間を愛してやまない神の姿が鮮やかに浮き彫りになるのです。

この並行する二重構造のヴェルテップ劇は、どこで一つの物語として、終わりを迎える(完結する)のでしょうか。マルコ福音書(新約聖書)では〈復活〉

です。主イエスが、復活において、生と死の閉じられた世界を突き破るとき、山上の出来事の背後に



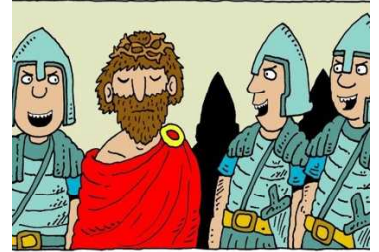
あった天上の力が、地上の現実の姿として露わになるのです。そして復活によって、十字架が、神の正義と愛を伝えるメッセージであることが確証されるのです。神は正義であるので処罰を与え、しかし神は愛であるがゆえに、ご自分の御子を処断されたのです。この神の正義と愛のメッセージは、復

活によって確証されるのです。十字架は神の愛と正義がクロスするところなのです。

わたしたちが読んでいるこの受難物語の、主イエスが陵辱されている悲惨なヴェルテップ劇の下段に対して、上段ではどのような劇が進行しているのでしょうか。上段の視線は、主イエスの惨劇を見据えながら、そこに神の言、預言が成就していることを見逃しません。まず、主イエスがエルサレムに上ってくる途中で弟子たちに語られた受難の予告です。第3回目の受難予告。10章33－34節。「10:33 『今、わたしたちはエルサレムへ上って行く。人の子〔＝イエスの自己呼称〕は祭司長たちや律法学者たちに引き渡される。彼らは死刑を宣告して異邦人に引き渡す。10:34 異邦人は人の子を侮辱し、唾をかけ、鞭打ったうえで殺す。そして、人の子は三日の



後に復活する。』」さらにイザヤ書の〈苦難の僕に〉に関する預言の言葉。50章6節。「イザ50:6 (彼は)打とうとする者には背中をまかせ／ひげを抜こうとする者には頬をまかせた。顔を隠さずに、嘲



りと唾を受けた。」さらに53章7節の言葉。「53:7 (彼は)苦役を課せられて、かがみ込み／彼は口を開かなかった。屠り場に引かれる小羊のように／毛を切る者の前に物を言わない羊のように／彼は口を開かなかった。」主イエスは生命よりも大切なものが存在することをご存知でした。み心を生き抜くこと。知恵や機転を利かせて生命の危険を逃れることなく、み心を生き抜いたからこそ、その後2000年もの間、彼を信じる者が絶えることなく彼の後に従ったのです。

さて、総督官邸から外へ主イエスを引き出す前に、兵士たちは抜け目なくイエスからユダヤ人の暴動を刺激するようなものはすべて取り除きます。イエスを見せ物に

することに満足した後、兵士たちは自分たちのプロ意識を取り戻しました。イエスは曲がりなりにも「ユダヤ人の王」と名指しされた罪人なのですから。反ローマ感情を刺激するかも知れない、そのような可能性のあるものはすべて取り除いたのです(15:20)。マルコはここでは、ドラマ全体を描くのに、よりいっそう生き生きとした描写をするために、過去形を使うところを現在形を使って、実況中継するかのよう to 語ります。〔このギリシア語の「歴史的現在」への時制転換は日本語には上手く出せませんが。〕「**彼らはイエスを十字架につけるために引き出し……通りかかったシモンというキレネ人にイエスの十字架を無理に担がせ……イエスをゴルゴタに連れていきます**」(15:20-22)。

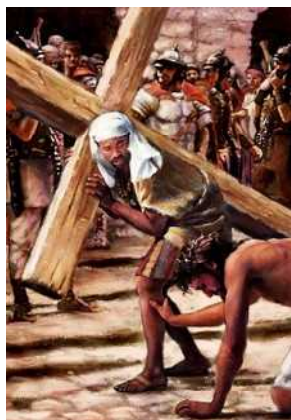
主イエスが自力でゴルゴタにまで行き着くことができないと見て



取って、兵士たちは、イエスを介助させるために、偶然そこ通りかかったキレネ人シモンをつかまえます。シモンに、選択の余地はありませんでした。現代風に言えば、囚人を絞首刑にするのに手を貸せと強制的に介助を命じられたということです。これはただシモンにとっては、途方もない当惑であり、彼は別の日に用事を済ませておけばよかったと思ったにちがいありません。

しかしこのことはシモンにとって決定的な経験になったのです。もう一度シモンが登場する場面を読みましょう。21節。「**15:21** **そこへ、アレクサンドロとルフォスとの父でシモンというキレネ人が、田舎から出て来て通りかかったので、兵士たちはイエスの十字架を無理に担がせた。**」この文章は、シモンに息子が二人いたことを伝えています。「**アレクサンドロとルフォス**」という息子です。ローマの信徒への手紙16章13節にはこのルフォスが出てきます。「**ロマ16:13** **主に結ばれている選ばれた者ルフォス、およびその母によろしく。彼女はわたしにとっても母なのです。**」パウロ

がローマに住む信徒たちに宛てた手紙の最後の挨拶の部分です。ここに「ルフォス」という名前が出てきます。つまりルフォス——とその兄弟や両親を含む家族——はローマの教会の中心的なメンバーで、「アレクサンドロとルフォス」



といえば初代教会に名前が通っていた人物なのです。パウロはその母親が「自分の母親同然」の人であると書いて、その家族

全体と親密なつきあいがあったことを示しています。その信仰の始まりは、父シモンのあの経験だったのです。父親のシモンと兄のアレクサンドロの名前がないのは、おそらくすでに殉教していた可能性があります。マルコは「アレクサンドロとルフォスとの父でシモンというキレネ人」と明記して、その父親が十字架の出来事の証人であることを示します。これによってアレクサンドロとルフォスの証言（キリストに関する情報）の信頼性が担保されているのです。

キレネ人シモンの姿は、敗走してしまった弟子たちの姿と対照的

です。主イエスを置き去りにして敗走してしまった弟子たちと、イエスに代わり十字架を負う田舎から出てきたキレネ人シモン。主イエスはかつて——8章34節で弟子たちと群衆に向かって——こういわれました。「8:34 ……『わたしの後に従いたい者は、自分を捨て、自分の十字架を背負って

(ἀράτω τὸν σταυρὸν αὐτοῦ)、わたしに従いなさい』。」今十字架を背負っているのは、弟子たちではありません。シモンが背負っているのです。シモンは弟子たちとは対照的に、十字架を背負って (ἄρῃ τὸν σταυρὸν αὐτοῦ) 従う者の姿を絵画的に示します——ここでは8章34節と同じ「背負う」という動詞 (ἄρῃν) が使われています。

十字架刑に処せられるものはふつつ横木のみを運ばされます。主イエスは裁判と拷問によって、その横木さえも運べないほど体力を消耗し疲労困憊していたのです。兵士たちは、シモンに十字架を担がせイエスを引いて、恐怖の場所へと行進していきます。22節。

「15:22 そして、イエスをゴルゴタという所——その意味は「されこうべの場所」——に連れて行っ

た。」「ゴルゴタ」は死の連想を強く持っている言葉です。「ゴルゴタ」はアラム語で「されこうべ」(髑髏^{どくろ})。よく使われる「カルバリ」は、これも「されこうべ」(髑髏)を意味するラテン語の〈カルバーリア〉に由来します。古代ラテン語訳のウルガタ聖書がこの言葉を使いました。十字架を背負うことのできないほど体力を消耗し、疲労困憊した主イエスの姿。そしてその道行きの最終到着地点が、「されこうべ」(髑髏)という所(丘)。

「ゴルゴタ」「カルバリ」されこうべという言葉によって「苦難」のイメージが強調されます。

そしてその場所で兵士たちは、鎮痛薬として用いられる(麻酔用の)没薬を混ぜた葡萄酒を主イエスに飲ませようとしますが、主イエスはそれを拒否します。それから、兵士たちは主イエスを十字架につけて、その服を分け合あいま



す。23 - 24 節。「15:23 没薬を混ぜたぶどう酒を飲ませようとしたが、イエスはお受けにならなかった。15:24 それから、兵士たちはイエスを十字架につけて、／その服を分け合った、／だれが何を取るかをくじ引きで決めてから。」

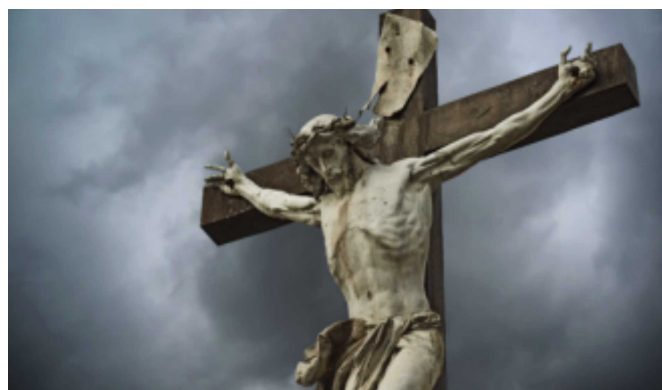


ローマの衛兵は十字架刑を、まるでワクチン接種をする看護師のように、手っ取り早く実行します。もちろん治療のためではなく、恐ろしい苦痛の始まりのボタンを押したのです。しかもそんなことは意にも介さず、早速、主イエスの所持品を手に入れるための駆け引きを開始します。まるでバザーかガレッジセールのようなようです。

歴史の中心となるこの瞬間を、これ以上に赤裸々に描写している福音書は、他にはありません。ともかくマルコは、話を飾ろう(修飾しよう)とするすべての本能に対抗します。それでも／それゆえ、この場面は、神と人間と世界の未来について、他の何にもましてよ

り多くのことを明らかにしてくれます。マルコの描写は、シンプルな線描画のように、人々の動きを図解的に示します。マルコの描写が向かっていく出来事を中心はわずか3語で物語られます。〔ギリシア語で **καὶ σταυροῦσιν αὐτὸν** の3語。新共同訳「そして兵士たちは彼を十字架につけた」15:24a.〕実にシンプルです。それなのに、「なぜそれ(この3語のメッセージ)はそのような力に満ちているのか」とウィリアムソン(邦訳435)という注解者は、驚きをあらわしています。それはその3語が、救いの完成を明確に宣言しているからです。

パウロはこの十字架がわたしたちのためであったと語ります。ローマ書5章8節。「**ロマ5:8** しかし、わたしたちがまだ罪人であったとき、キリストがわたしたちのために死んでくださったことによ



り、神はわたしたちに対する愛を示されました。」キリストがわたしたちのために死んだということです。しかも罪人であったわたしたちのために死んだと言うのです。そしてその死が神の愛の現われだということです。「まさか。」十字架を通して神が「I love you」と言っているということです。「まさか」です。罪人を救うためにキリストの死が必要だったということです。

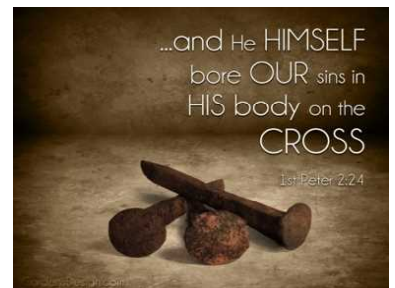
「まさか」と思うのです。それにわたしは、そんなたいそうな罪人ではありませんし、とわたしたちは思うの



です。しかしヘブライ人への手紙9章22節はこう言います。「**ヘブル9:22** こうして、ほとんどすべてのものが、律法に従って血で清められており、血を流すことなしには罪の赦しはありえないのです。」軽い罪も重い罪も一緒くたじゃないか、量刑が不均衡だと言いたくなります。わたしたちはここで罪の軽重という考え方に修正を加えられます。マルコの7章で「**マル7:5**……なぜ、あなたの弟

子たちは昔の人の言い伝えに従って歩まず、汚れた手で食事をするのですか」というファリサイ派の人々と律法学者たちから受けた非難に対して、主イエスはこう答えました。7章21－23節。「マル7:21 中から、つまり人間の心から、悪い思いが出て来るからである。みだらな行い、盗み、殺意、7:22 姦淫、貪欲、悪意、詐欺、好色、ねたみ、悪口、傲慢、無分別など、7:23 これらの悪はみな中から出て来て、人を汚すのである。」人間の罪は、手を洗うとか先祖の言い伝えに従うとか外面的な宗教行為で解決できるものではないのです。罪の根源は人の「心」の中にあるということです。神を神としない心、自分を造り自分を生かしてくださる方を無視する心、自分は自分だけで生きられると慢心する心から出てくるのです。この神をないがしろにする心が、新たにされ、清められるためにキリストが血を流したということです。これはもう論証の対象ではないのです。信仰の対象なのです。信じるしか手はないのです。信じるとは、確かめることなく、自分を開くことです。そのとき罪

ある者を愛してやまない神の存在がリアルになるのです。最後にペトロの手紙―2章24－25節をお読みします。「1ペト2:24 そして(主イエスは)、十字架にかかって、自らその身にわたしたちの罪を担(負)ってくださいました。わたしたちが、罪に対して死んで、義によって生きるようになるためです。そのお受けになった傷によって、あなたがたはいやされました。2:25 あなたがたは羊のようにさまよっていましたが、今は、魂の牧者であり、監督者である方のところへ戻って来たのです。



新しい一週間も主と共に歩んでまいりましょう。お祈りします。

2019.9.15 日本基督教団千歳丘教会

15:16 兵士たちは、官邸、すなわち総督官邸の中に、イエスを引いて行き、部隊の全員を呼び集めた。
15:17 そして、イエスに紫の服を着せ、茨の冠を編んでかぶらせ、
15:18 「ユダヤ人の王、万歳」と言って敬礼し始めた。
15:19 また何度も、葦の棒で頭をたたき、唾を吐きかけ、ひざまずいて拝んだりした。
15:20 このようにイエスを侮辱したあげく、紫の服を脱がせて元の服を着せた。そして、十字架につけるために外へ引き出した。
15:21 そこへ、アレクサンドロとルフォスとの父でシモンというキレネ人が、田舎から出て来て通りかかったので、兵士たちはイエスの十字架を無理に担がせた。
15:22 そして、イエスをゴルゴタという所――その意味は「されこうべの場所」――に連れて行った。
15:23 没薬を混ぜたぶどう酒を飲ませようとしたが、イエスはお受けにならなかった。
15:24 それから、兵士たちはイエスを十字架につけて、／その服を分け合った、／だれが何を取るかをくじ引きで決めてから。
15:25 イエスを十字架につけたの

は、午前九時であった。
15:26 罪状書きには、「ユダヤ人の王」と書いてあった。
15:27 また、イエスと一緒に二人の強盗を、一人は右にもう一人は左に、十字架につけた。
15:28 （✠底本に節が欠落 異本訳）こうして、「その人は犯罪人の一人に数えられた」という聖書の言葉が実現した。
15:29 そこを通りかかった人々は、頭を振りながらイエスをののしって言った。「おやおや、神殿を打ち倒し、三日で建てる者、
15:30 十字架から降りて自分を救ってみろ。」
15:31 同じように、祭司長たちも律法学者たちと一緒にあって、代わる代わるイエスを侮辱して言った。「他人は救ったのに、自分は救えない。
15:32 メシア、イスラエルの王、今すぐ十字架から降りるがいい。それを見たら、信じてやろう。」一緒に十字架につけられた者たちも、イエスをののしった。

15·16 Οἱ δὲ στρατιῶται ἀπήγαγον αὐτὸν ἔσω τῆς αὐλῆς, ὃ ἐστὶν πραιτώριον, καὶ συγκαλοῦσιν ὅλην τὴν σπεῖραν.

15·17 καὶ ἐνδιδύσκουσιν αὐτὸν πορφύραν καὶ περιτιθέασιν αὐτῷ πλέξαντες ἀκάνθινον στέφανον·

15·18 καὶ ἤρξαντο ἀσπάζεσθαι αὐτόν, Χαῖρε, βασιλεῦ τῶν Ἰουδαίων·

15·19 καὶ ἔτυπτον αὐτοῦ τὴν κεφαλὴν καλάμῳ καὶ ἐνέπτυνον αὐτῷ καὶ τιθέντες τὰ γόνατα προσεκύνουν αὐτῷ.

15·20 καὶ ὅτε ἐνέπαιξαν αὐτῷ, ἐξέδυσαν αὐτὸν τὴν πορφύραν καὶ ἐνέδυσαν αὐτὸν τὰ ἱμάτια αὐτοῦ. καὶ ἐξάγουσιν αὐτὸν ἵνα σταυρώσωσιν αὐτόν.

15·21 Καὶ ἀγγαρεύουσιν παράγοντά τινα Σίμωνα Κυρηναῖον ἐρχόμενον ἀπ' ἀγροῦ, τὸν πατέρα Ἀλεξάνδρου καὶ Ρούφου, ἵνα ἄρῃ τὸν σταυρὸν αὐτοῦ.

15·22 καὶ φέρουσιν αὐτὸν ἐπὶ τὸν Γολγοθᾶν τόπον, ὃ ἐστὶν μεθερμηνευόμενον Κρανίου Τόπος.

15·23 καὶ ἐδίδουν αὐτῷ ἐσμυρνισμένον οἶνον· ὃς δὲ οὐκ ἔλαβεν.

15·24 καὶ σταυροῦσιν αὐτὸν καὶ

διαμερίζονται τὰ ἱμάτια αὐτοῦ, βάλλοντες κλῆρον ἐπ' αὐτὰ τίς τί ἄρῃ.

15·25 ἦν δὲ ὥρα τρίτη καὶ ἐσταύρωσαν αὐτόν.

15·26 καὶ ἦν ἡ ἐπιγραφή τῆς αἰτίας αὐτοῦ ἐπιγεγραμμένη, Ὁ βασιλεὺς τῶν Ἰουδαίων.

15·27 Καὶ σὺν αὐτῷ σταυροῦσιν δύο ληστές, ἓνα ἐκ δεξιῶν καὶ ἓνα ἐξ εὐωνύμων αὐτοῦ. (v.28)

15·29 Καὶ οἱ παραπορευόμενοι ἐβλασφήμουν αὐτὸν κινοῦντες τὰς κεφαλὰς αὐτῶν καὶ λέγοντες, Οὐὰ ὁ καταλύων τὸν ναὸν καὶ οἰκοδομῶν ἐν τρισὶν ἡμέραις,

15·30 σῶσον σεαυτὸν καταβὰς ἀπὸ τοῦ σταυροῦ.

15·31 ὁμοίως καὶ οἱ ἀρχιερεῖς ἐμπαίζοντες πρὸς ἀλλήλους μετὰ τῶν γραμματέων ἔλεγον, Ὑλλους ἔσωσεν, ἑαυτὸν οὐ δύναται σῶσαι·

15·32 ὁ Χριστὸς ὁ βασιλεὺς Ἰσραὴλ καταβάτω νῦν ἀπὸ τοῦ σταυροῦ, ἵνα ἰδωμεν καὶ πιστεύσωμεν. καὶ οἱ συνεσταυρωμένοι σὺν αὐτῷ ὠνείδιζον αὐτόν.